

## 第73回 歴史リレー講座「聖徳太子のころ」 古谷 正覚氏 (R2.10.18)

来年 2021 年は聖徳太子御遠忌 1400 年にあたります。法隆寺聖霊院では毎年 3 月 22 日から 24 日にかけて会式（法会儀式）が行われます。会式は太子の命日法要のことで、法隆寺史料『別當記』によると奈良時代中頃から始まったとされます。もともと命日の 2 月 22 日に行われていましたが、明治 43 年になって新暦の 3 月に変更されました。日程は太子ゆかりの寺院によっても異なり、例えば四天王寺や橘寺、太子の墓がある叡福寺などでは 4 月です。法隆寺会式は聖霊院の「小会式」と、10 年に一度、夢殿などで行われる「大会式」があります。鎌倉時代には源頼朝が法要に使う舞台や幡（旗）を寄進しています。

聖徳太子は推古 30 年（622）、49 歳で死去しました。史料には厩戸皇子、上宮太子、豊耳聡聖徳、聖徳王など様々な呼び名が記されていますが、「聖徳太子」は没後 100 年頃につけられた名前です。中世の中頃には、太子信仰の高まりとともに聖徳太子伝が編纂されました。母の穴穂部間人皇女が厩の前で産気づいたことや、一度に 8 人からの質問に正しく答えたなどの伝説は誰もが知るところです。

太子が生きた時代は、外交、国内情勢ともに混沌としており、皇位継承問題に加えて叔父である穴穂部皇子が殺害されるなど、貴族同士の権力争いが絶えませんでした。そこで、平和な世の中を実現するために太子が抛りどころとしたのが仏教でした。仏教伝来は 538 年と言われ、百済王が使者を通じて日本に仏像と経典を贈ったことが始まりです。やがて導入の是非をめぐる豪族同士の熾烈な争いに発展。物部氏らは仏像を難波の堀江に流し、対する太子は勝利を願って難波に四天王寺の建立を誓いました。戦いは太子軍の勝利に終わり、仏教が国中に広まっていくこととなります。

推古天皇即位と同時に摂政となった太子は 594 年、三宝（仏・法・僧）を敬うことを政策としてすすめ、現代の寺にあたる仏舎を初めて造りました。そして 604 年には十七条憲法を制定。「一に曰く、和を以て貴しと爲し、忤さからふこと無きを宗と爲よ。…二に曰く、篤まがく三寶を敬え。…人尤はなはだ悪すくしきもの鮮すくなし、能く教ふれば従ふ。其れ三寶に歸せずんば何を以てか枉まがれるを直たださん」（上に立つ者と部下が和睦して事に当たれば実現できないことは何もない。いかなる時代のいかなる人も三宝の教えを敬わねばならない。たとえ極悪人であっても更生できる。三宝に帰依せずして彼らの邪な心を正すことができるだろうか）と、仏教を根幹とした役人の心得を説いています。

また、太子は勝鬘経や法華経、維摩経を相当深く研究しており、これらの経の注釈書ともいえる『三経義疏』を著しているほどです。606 年には斑鳩の岡本宮で推古天皇に法華経を解説した褒美として播磨国（兵庫県太子町）の水田を賜りました。太子が晩年に残した言葉「世間虚こけ仮 唯仏是真」（世間とは虚しいものだ。仏の教えのみが唯一の真理である）は、太子の死を嘆き悲しんだ妃の橘大郎女が作らせた天寿国繡帳（中宮寺所蔵の染織、国宝）に記されています。「世間虚仮」の意味は、「人間の体というものは、頼りにならないものである。因縁によって生まれ、煩惱から成り立っている。しづきのように捉えどころの無いもので、一瞬たりとも留まってははいない。そして変化して滅びるものだ」というものです。

仏教では、身（行為）、口（言葉）、意（心）による十もの悪行を十悪といます。したがって、不殺生、不偷盗、不邪淫、不妄語、不綺語（無意味なお喋りをしない）、不悪口（乱暴な言葉を使わない）、不両舌（筋の通らないことを言わない）、不慳貪（欲深いことをしない）、不嗔恚（耐え忍んで怒らない）、不邪見（間違った考え方をしない）が仏教者が行うべき十善となります。

太子は生涯を通して国家の安寧を願い、三宝を「財物とは違い、決して滅びることのない永遠の存在」として敬い、政治に活用しました。篤い信仰心は三宝と同じく太子の最期まで滅びることはありませんでした。